特集

地域で支える治水対策

近年、気候変動の影響により全国各地で豪雨被害が頻発しています。さらに今後、降雨量の増大により水災害の拡大や頻発化が予測されています。

このような水災害リスクの増大に備えるため、あらゆる関係者と一体となって流域全体で水災害を軽減させる「流域治水」が注目されています。

んぼダムの取り組み

流域治水の一つとして、市では田んぼの持つ貯水機能を活用する「田んぼダム」の取り組みを令和6年度より開始しました。

田んぼダムとは、水田の排水口に専用のセキ板を設置し、雨水を一時的に田んぼに貯めることで、河川への急激な流出を抑える仕組みです。

田んぼが地域の安全

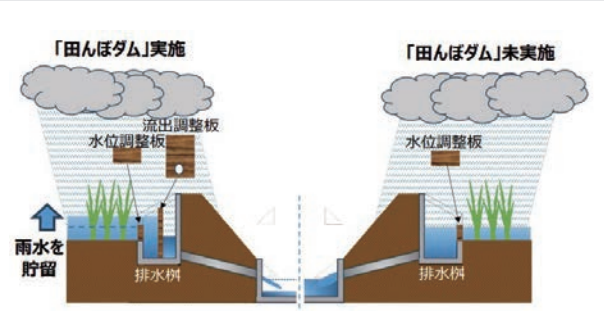
小郡市の花立区域および三沢区域では、田んぼダムの取り組みが進められています。

この取り組みについて、花立区域で中心的な役割を担う農家の一人、鶴田徳さんにお話を伺いました。

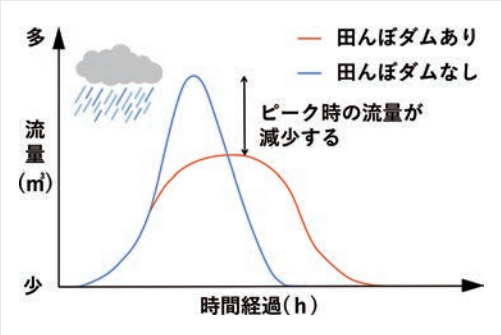
「最初は本当に効果があるか半信半疑でした。でも、令和6年の大雨の時に水の流れがゆるやかになっているのを見て、手ごたえを感じました。営農にも影響がなく、自分たちの田んぼが地域の安全につながっていると思うと、やりがいを感じます。一人ではできないことも、みんなで取り組めば大きな力になります」と鶴田さん。

流水治水は行政だけでなく、地域住民一人ひとりの協力が必要不可欠です。花立区域の取り組みは、小さな工夫の積み重ねが大きな防災力につながることを示しています。

花立区域の農家の皆さん。左から2番目が鶴田さん。



田んぼダムの排水イメージ（出典）農林水産省



田んぼダムの効果イメージ
（ピーク時の流量を下げる）

問 農業振興課 農村整備グループ
☎73-9100

大板井堰の様子。上が通常(起立)時、下が倒伏時。

先行排水の取り組み

市では、水災害に備える取り組みとして、大雨が予想される際に農業関係者協力のもと、河川や水路にある堰や水門を先行的に開放する取り組みやため池の水位を大雨前に下げる取り組み(先行排水)を推進しています。

先行排水は、令和4年度から運用を開始しており、費用対効果が非常に高く、水害を軽減できる取り組みの一つです。

農業への影響に配慮しつつ、先行排水で水害対策を推進

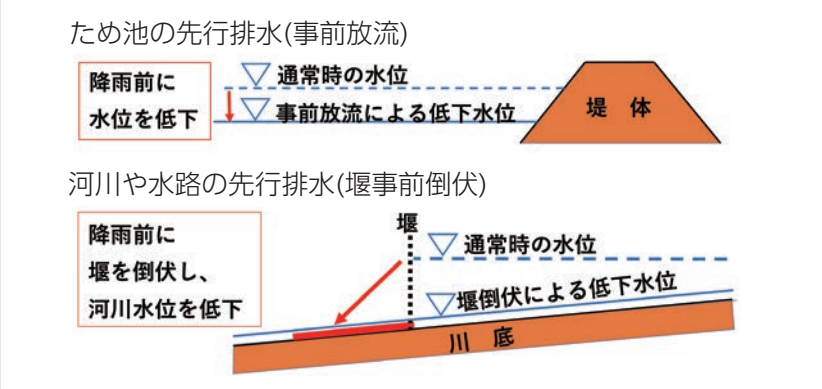
この取り組みについて、宝満川にある4堰(津古・大板井・稲吉・端間)の連絡調整にあたる、小郡市土地改良事業連合協議会の大津洋一郎事務局長にお話を伺いました。

「平成30年の豪雨から毎年のように水害が発生し、農業面からできることはないかと、先行排水を市と一体となって進めてきました。農業関係者からは、『雨が降らなければ河川の水がなくなり、農業に支障が出てしまう』などの意見もありましたが、近年の大雨予想が大きく外れることはなく、現在まで特に大きな支障はありません。

小郡市は宝満川という大切な水資源や環境に恵まれている一方で、大雨時には河川が氾濫する危険もあります。

この取り組みにより、少しでも水害が軽減できればと思っています。今後も、引き続き市と一体となって、営農に支障のない範囲で進めていきたいと思います」

これからも市では、こうした地域と連携した取り組みを推進しながら、安全安心なまちづくりを進めていきます。



先行排水の事業効果

(例)宝満川

河川延長9㎞、河川幅50mの河川を水位1m下げた場合…

9,000m×50m×1m＝45万㎥

25mプール1,500杯分の空き容量確保！